

# 『堤中納言物語』「思はぬ方にとまりする少将」論

——多様な女房たちの標本——

陣野 英 則

## はじめに

『堤中納言物語』の中に収められている短篇物語「思はぬ方にとまりする少将」は、亡き大納言家のふたりの姫君のうち、姉君は右大将家の少将と、そして妹君は右大臣家の権少将と、それぞれ関係をもっていたものの、あるとき権少将の方が姉君と、また少将が妹君と契りをむすぶことになってしまったという、四角関係の物語である。

このように姉妹が取り違えられてしまうという物語内容に関しては、「猟奇的」などとも評されてきたが（鈴木「一九八〇」の二九二頁ほか多数）、姉妹をめぐる物語も、そして取り違えという事態が語られることさえも、物語文学史においては決して突飛であるとはいえないだろう。先行研究においても、『源氏物語』の「宇治十帖」、また『夜の寝覚』などといった姉妹の物語との関わりが指摘されて

きた。とりわけ「宇治十帖」の大君および中の君の物語を想起させる面は顕著であるが、たとえば野村「一九八四」はそのことを肯定した上で、取り違えを起こす女房のあり方などに注目し、特に「浮舟」巻などとの重なりも重視する。一方、神田「一九八五」は、この「思はぬ方にとまりする少将」において、さまざまな「対立的契機」一切が意味をもたなくなってしまう「いることなどを指摘した上で、「宇治十帖」のパロディであるとともに、「長篇物語」というものの様式そのもののパロディたり得てもいた」という見解を示している。さらに、これらの先行論を受ける下鳥「二〇〇二」は、「宇治十帖」、『夜の寝覚』などとの関わりに留意しつつ、この物語の跋文にみえる「劣りまさるけちめ」（十一才）という語句を丹念に検討した上で、姉妹物語でありながら、この物語作品の終結部において「二人妻」の物語を支える論理を接続してみせたという独自性をとらえている。姉妹物語として異例であることは神田論文でも指摘されていたが、この下鳥論文によって、その異例さが物語文学史の

展開の中に位置づけられたといえるようにおもふ。

こうした議論がある一方で、その叙述のあり方に関しては、夙に松村「一九五九」が「筋書き式」ととらえ、「筋の運びにだけ力を注ぎ」、「こまかな描写はすべて犠牲にする」という特徴を指摘していた。松村論文は、それをひとつの「技巧」と見なそうとするのだが、端的に言えば、それは物語作品としての弱さといえるだろう。物語展開の単純さについては、西木「一九七〇」も批判的に指摘している。そして野村「一九八四」も、この物語は「独自性を発揮すべき」後半部において「宇治十帖」を想起させるような「描出に終始」しており、「あたかも、創造という営みを拒絶しているかの観すらある」と評している。さらに神田「一九八五」は、「登場人物の内奥へ」と「入ることを極力拒否してしまう」ような「表現構造」に注目した上で、「長篇物語的相貌を呈しつつも短篇である」という独自性はあるながら、しかし「深みのない世界」を仕立ててしまった物語とみている。

右のように、総じて評価の低い作品なのだが、それでも、こうした物語が創られ、そして読み継がれ、『堤中納言物語』という短篇集に収められることにもなった。いったい、それはなぜなのだろうか。こうした疑問に答えようとするとき、いまさら姉妹の取り違えという物語内容に拘泥しても、おそらく埒が明くことはなからう。薄っぺらといわざるをえない物語後半部に「独自性」を見いだすことは、野村論文のいうとおり、かなり難しい。それは、取り違えを

語る後半部を「主題的場面」あるいは「物語の山場」（神田論文）などと受けとめることにそもそも無理がある、ということではないか。

そこで、筆者としては、短い物語でありながら少なからぬ女房が登場し、それぞれが果たしている役割も実にさまざまであるという点に留意してみたい。右大將家の少将にしても、右大臣家の権少将にしても、故大納言家の姫君たちと関係をむすぶようになるのは、当然ながら、姫君方の女房のはたらきがあつてのことである。さらに、物語後半部における二組の取り違えという事態は、偶然の出来事ともいえるが、実際には、男君が派遣した使者と、姫君方に仕える側近の女房とのやりとりにおける過誤が直接的原因といえる。

先行論の中では、野村「一九八四」が「思はぬ方にとまりする少将」の脇役たちを詳しくとりあげており、とりわけ『源氏物語』における女房たちとの重なりなどが丁寧におさえられている。そうした検討には十分な意義がみとめられるが、それに加えて、「思はぬ方にとまりする少将」がいかに読まれ、いかに受容された可能性があるのか、という視座を接続してみることによって、あらたな議論がひらかれるように予感する。

本稿では、従来のテキストの解釈における疑問点などについて丁寧に検討しつつ、右のような目論見のもと、この短篇物語において幾人もの女房たちの示している行動の数々がある種の標本として利用された可能性を考えてみることになるだろう。

## 一 「色めきたる若き」女房の大雑把な手引き

まずは、「思はぬ方にとまりする少将」の前半の展開に即しつつ、女房たちのあり方をとらえ、それぞれの特徴をおさえてゆく。

本文では、「昔物語などにぞかやうの事は聞こゆるを……」（一オ）と始まる前口上につづけて、二人の姉妹が紹介されている。

①大納言の姫君二人ものし給ひし、まことに物語に書きつけたるありさまに劣るまじく、何事につけても生ひ出で給ひしに、父大納言も母上もうちつゝきかくれ給ひにしかば、いと心細き古里にながめすごし給ひしかど、はか／＼しく御乳母だつ人もなし。

（一オー一ウ）

姫君たちは、父にも母にも先立たれており、それぞれの将来はかなり不安定であると予想される。加えて注意すべきは、傍線部のように「はか／＼しく御乳母だつ人」さえ不在だという点であろう。吉海「二〇〇一」は、この乳母の不在を「スワッピングまがいの取り違えが発生する」前段階の、「必然的状況（伏線）」だとみている。しっかりとした乳母の存在こそが姫君たちにとってはきわめて重要であつて、トラブルを未然に防ぐ役割をも果たしうるとみてよいだろうから、この物語後半部の展開に乳母の不在という状況が関わってくるという吉海論文の指摘は、首肯される。ただし、乳母が不在であるからこそ、（乳母子をふくむ）ほかの女房たちがさまざまに

関わっているという点も、いっそう留意されなくてはならないだろう。

次に、本文①の直後から引用する。

②たゞつねに候ふ侍従、弁などいふ若き人々のみ候へば、年にそへて人目稀にのみなりゆく古里に、いと心細くておはせしに、右大將の御子の少將、知るよしありて、いとせちに聞こえわたる給ひしかど、かやうのすぢは、かけてもおぼし寄らぬ事にて、御返事などおぼしかけざりしに、少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人、何のたどりもなく、二所、御とのごもりたる所へ、導き聞こえけり。

（一ウー二オ）

まず傍線部では、「侍従、弁など」の「若き人々のみ」が仕えているということが示されている。物語の後半に至ると、侍従が姉君に近侍し、弁が妹君に近侍しているということが明確になるが、ここでは二人の姫君たちに仕える「若き人々」としてひと括りにされている。そして、「人目」が「稀」となり、とても「心細く」なっているという故大納言家の窮状が示唆されたのち、早々と右大將家の少將の懸想が語られてゆく。

この少將を導くことになるのが、二重傍線部の「少納言の君」である。この二重傍線部に注目した野村「一九八四」は、『源氏物語』の作中において、若くて色めかしい女房が恋の仲立ちとなった四つの例を示しているのだが、それらの中でも、二重傍線部の「いといたう色めきたる若き人」という表現は、とりわけ「末摘花」巻にの

み登場する大輔命婦の紹介の仕方を彷彿とさせるだろう。

左衛門の乳母<sup>めのと</sup>とて、「源氏ガ」大弐<sup>だに</sup>のさしつぎにおぼいたるがむすめ、大輔<sup>たいふ</sup>の命婦<sup>めいふ</sup>とて内にさぶらふ、わかむどほりの兵部の大輔なるむすめなりけり、い<sup>い</sup>と<sup>い</sup>う<sup>う</sup>色好める<sup>いろこの</sup>若人<sup>わか</sup>にてありけるを、君<sup>きみ</sup>（「源氏」）も召し使ひなどし給ふ。

（末摘花、二〇一～二〇二頁）

この大輔命婦は、右の本文からもわかるように、光源氏の乳母の一人「左衛門の乳母」の娘である。つまり、光源氏にとっての乳母子であるわけだが、それとともにこの人物は、故常陸宮邸の関係者として出入りしているため、末摘花のこともすこしばかり知っている。かつて、陣野「二〇〇四」で論じたのだが、大輔命婦の場合、末摘花に関する充分な情報をもちえていないにもかかわらず、光源氏がこの姫君に関心を寄せるようにと、つい煽ってしまうことがあった。それでいながら、光源氏が乗り気になってから後は、かなりいい加減な対応を重ねている。末摘花付きではない上に、何より「い<sup>い</sup>と<sup>い</sup>う<sup>う</sup>色好める」と形容される若い人物であり、その無責任ぶりは際立っていた。

「思はぬ方にとまりする少将」で右大将家の少将を手引きした少納言の君に関する二重傍線部「い<sup>い</sup>と<sup>い</sup>う<sup>う</sup>色めきたる若き人」は、「末摘花」巻の大輔命婦に関する二重傍線部の叙述とかなり近い。この表現から大輔命婦を想起する読者は（筆者がその一人ということであるが）、いかにも無責任な女房といったニュアンスをくみと

ることとなるだろう。実は、この短篇物語において、「少納言の君」という名が示されるのは本文②のみである。このあとは、おそらく「人々」という複数の女房たちの中の一人として紛れ込んでしまっているのだろう。

ところで、この少納言の君は、右大将家の少将を姉妹二人が「御とのごもりたる所へ」と手引きしている。この導き方が実に大雑把であり、いい加減というべきではないだろうか。その点をより詳しく検討するために、本文②の直後にも注目してみる。次の③である。ここで、女房の動向は何も語られていないが、いささか難解な問題を孕んでいるようだ。

③（少将ハ）もとより御心ざしありける事にて、姫君をかきいできて、御帳<sup>みてう</sup>のうちへ入り給ひにけり。（姫君ガ）おぼしあきれたるさま、例の事なれば、書かず。（二才）

この傍線部の「……書かず」という省筆については、これまでも注目されてきた。それは、松村「一九五九」のいう「筋の運びにだけ力を注」ぐような叙述であり、「姫君」の心中に深入りしない語り方ともいえるだろう。

さて、③でむずかしいのは、破線部「もとより御心ざしありける事にて」である。ここは、「もともと姉姫君に懸想<sup>けそう</sup>していたことなので」（稲賀「二〇〇〇」の現代語訳）などと解されてきた。管見の限り、この解釈は諸注で一致している。しかし、はたして侵入した少将のターゲットは姉君にしばらくいられたのだろうか。というの

も、本文②では、二人の姫君が「御とのごもりたる」とされていた。当然、そこは暗い空間であって、侵入していきなり姉妹のいずれかを判別するのは容易なことではない。そもそも、本文が至極あつさりとしているのでよくわからないが、この少将は、たとえば既に姫君たちを垣間見る機会を得ていて、二人の容貌の違いを確認済みであつたなどということがありうるのだろうか。

仮に、侵入してきた少将には、『源氏物語』「橋姫」巻において薫が宇治の姉妹を垣間見たケースと同様の経験が既にあつたと想定してみよう。たとえそうであっても、侵入時点でいずれが姉でいずれが妹かを判別することなど、おそらく不可能であろう。陣野「二〇〇六」で論じたように、薫も初めて垣間見た時点で姉妹を識別することなどかなわなかつた<sup>③</sup>。つまり、少納言の君に手引きされて侵入した少将が、最初から姉君の方に狙いを定めて侵入し、正確に姉君を抱きかかえたということは自明ではない。むしろ、そのような計画的行動をとることなどきわめて困難であると想像されよう。そうすると、本文③、破線部の「御心ざし」は、故大納言家の姉君一人へのものではなく、同家の姫君たちに対する「御心ざし」と解すべきであろう。

なお、本文③の「姫君」を諸注は姉君と解している。たしかに、このあとの物語叙述において、「姫君は廿に」<sup>④</sup>などやあまり給ふらん、中の君はいま三ばかりや劣り給ふらん（四ウ）という箇所があることから、「姫君」を姉の方だと解することは可能であり、妥

当でもあるのかもしれない。しかし、右大将家の少将の侵入を語る本文③において、即座に「姫君」を姉君と解せるわけではなからう。こうした問題をとらえた場合に、本文②で少将を手引きした少納言の君の「何のたどりもなく」対応したいい加減さも、うまく照応するだろう。二人の姫君が就寝している部屋にいきなり少将を導いてしまうほど大雑把な少納言の君が、少将に対して、いずれが姉君であるかということを事前にしっかり教え込んでいるとは考えにくいのではないか。

右のように解釈したとき、「思はぬ方にとまりする少将」の後半部において、姉妹を取り違えてしまうという物語の展開についても、考え直すべき点がみえてくるだろう。二つのカップルが成立したのちに取り違えが起きたということは否定しえない。だが、そもそも右大将家の少将が最初に関わりをもった相手が姉君であつたということは、偶然としかいいようがない——この物語において語られる男女関係というのは、これほどまでに乾いたものであつたともいえるようか。

以上、少納言の君という「いといたう色めきたる若き人」の「がさつな」導き<sup>⑤</sup>がこの物語の実質的な出発点であることをとらえ、あわせて、導かれた少将が当初から姉君を姉君と認識して関係をむすんだとする従来の解釈が大いに疑わしいことを確認した。



## 二 妹君へと権少将を導く女房とその周辺

その後の物語の展開を簡単におさえると、右大將家の少将は人目をしのびつつ故大納言邸に通うようになったものの、そのことを聞いた父右大將は、相手方が「いと心細きところ」（二才）、つまり経済的にも不如意であり、将来性に乏しいことから、結婚を是認しない旨を息子に伝えた。それゆえに思うがままに通えなくなる少将ではあったが、相手を見棄てるわけではなく、間をおきながらも通うことをやめないのであった。

あるとき、少将が宮中から退出し、そのまま故大納言邸へと訪れることがあった。そこでは、わずかながら女房の対応が語られてもいるので、ここで確認しておく。

④少将、内裏うちより出で給ふとて、「故大納言邸二」おはしてうちたゞき給ふに、人々おどろきて中の君起こし奉りて、わが御方へわたし聞こえなどするに、……（三才―三ウ）

この傍線部で初めて「中の君」という呼称が本文にでてくる。不意に少将が訪ねてきたとき、姉君の居室で一緒に寝ていた妹君を自身の居室へと移すようにうながすのは、傍線部の「人々」、すなわち女房たちである。前節の本文③に関する検討をふまえるならば、私たち読者は、この本文④に至って初めて、右大將家の少将が関係をもった相手が姉君の方であったと確信しうるといふべきであろう。

さて、その少しあとから、この「中の君」、すなわち妹君に関わる物語が展開する。

⑤かやうにてあかし暮し給ふに、中の君の御乳母めのとなりし人は失せにしが、娘一人あるは、右大臣の少将の御乳母めのと子の左衛門の尉ぜうといふが妻なり。「乳母ノ娘ガ中君ニ関シテ」たぐひなくおはするよしを語りけるを、かの左衛門の尉、少将に、「しかぐな  
んおはする」と語り聞こえければ、……（三ウ―四才）

ここでは、妹君の乳母が亡くなっていることと、その「娘一人」の存在があわせて示されている。この「娘」は、すなわち妹君の乳母子ということである。なぜか、その伺候名は示されない。その代わりに、やや紛らわしい説明ながら、右大臣家の少将（権少将）にとつての「御乳母子」にあたる左衛門の尉が、妹君の乳母の娘とむすばれていることが明かされる。つまり、故大納言家の妹君と、右大臣家の権少将と、それぞれの乳母子どうしが結婚していることから、以下、この男女の間でそれぞれの主人をむすばせようという話が進む。まずは右の⑤にあるように、妹君の乳母の娘が左衛門の尉に中の君が「たぐひなく」優れていることを語ると、左衛門の尉は主人にあたる権少将にその情報を語り伝える。

権少将は、既に「按察使の大納言」の姫君と結婚していたが（四才）、その妻が気に入らず、また「あくがれありき給ふ君」でもあったので（同）、故大納言家の妹君に懸想文を届けるようになる。しかし、妹君当人はむすばれることを望まず、この懸想を聞き知った

姉君も、自分の不安定な身の上を顧みつつ、北の方がいる権少将を  
通わせることがいかに危ういことか、と嘆くのであった。このあた  
りの姉君のあり方には、もちろん「宇治十帖」における大君を連想  
させるものがあるう。

その後、姉妹の年齢と、「たのもしげなき御さまども」(四ウ)が  
語られたのちに、物語は次のように展開してゆく。

⑥左衛門、あながちにせめければ、太秦<sup>うづまさ</sup>にこもり給へる折を、〔左  
衛門カラ権少将<sup>(4)</sup>二〕いとよく告げ聞こえてければ、何のつゝま  
しき御さまならねば、ゆくりなく入り給ひにけり。(四ウ)

ここで「太秦にこもり給へる」と語られる人物が姉君か、それと  
も妹君か判然とせず、諸注釈でも解釈が割れている。この本文⑥で  
は表面に出てこないが、鍵をにぎるのは妹君の乳母の娘であらう。  
彼女がまずパートナーの左衛門の尉からかなり責め立てられたこと  
から、権少将を導きやすそうな機会をうかがい、それに関する情報  
を左衛門の尉に提供し、さらに今度は左衛門の尉が主人の権少将に  
「よく告げ聞こえ」という展開となっているだろう。つまり、そ  
もそもは妹君の乳母の娘がセッティングしているわけである。仮に、  
妹君が普段住まう場所ではない太秦に滞在しているという状況で  
あったとすると、権少将を手引きするのに困難がともなうだろう。  
したがって、姉君とその側近の女房らが太秦に移動していたと解す  
るのが妥当と考える。常々よりも人が疎らな状況であることをふま  
えて、妹君の乳母の娘は機会到来ということを左衛門の尉に伝え、

そして権少将は易々と侵入し、契りをむすぶことになったとおもわ  
れる。

本文⑤・⑥において、妹君の乳母の娘に関する叙述はかなりあつ  
さりとしており、伺候名もなく、存在感が薄いようにみえる。しか  
し、実態としては右のように察せられるのであって、そのはたらし  
は妹君の今後を左右するものであった。

ところで、前節で確認した少納言の君と、この妹君の乳母の娘と  
の重要な共通点が二つある。一つはもちろん、主人にあたる姫君の  
意向を無視して少将あるいは権少将を手引きしたということである。  
そしてもう一つは、物語内での語られ方の問題だが、手引きをした  
あと、これらの人物は表立って語られることが一切ないという点で  
ある。このことについては、最後にあらためて考えてみたい。

### 三 姫君たちを右大将邸に通わせるという選択

その後、右大臣家の権少将は、故大納言家の妹君とのあらたな関  
係を父右大臣から諫められてしまふ。父大臣は、権少将の北の方の  
父である按察使大納言の反応を懼れているのであった。父の諫めに  
より権少将は、姉君のもとへ通う少将と比べても、それ以上に訪れ  
が稀になってしまったという。

つづいて、本文ではこれら二人の少将、すなわち右大将家の少将  
と右大臣家の権少将の親密な関係が説明される。ここには本文上の

大きな問題があるので、次の引用本文⑦は、底本を校訂せずに示すこととしよう。

⑦この右大臣殿の少将は右大臣のきたのかたの御せうとにものし給へは少将たちもいとしたしくをはするかたみにこのしのひ人もしり給へり  
(五オウ五ウ)

この本文を改訂せずに読み解くことは可能だろうか。かつて、たとえば豊島「一九八三」が「通説」としていたのは、二重傍線部「右大臣殿の少将」(＝権少将)が、「右大将の北の方の兄弟である」と解する説であった。これは、破線部の本文「右大臣の」を「右大将の」と改めることを前提としている。仮にこうした改訂と解釈とが正しいとすれば、右大臣家の権少将は、右大将家の少将にとって叔父ということになる。

一方、破線部を「右大臣の、きたのかたの御せうとに……」と区切り、「父の右大臣が右大将の北の方の兄でいらつしやるので」とと解したのが稲賀「一九七二」である。以降、この稲賀説にしたがう注釈書が増えてくる。このように解する場合、右大臣家の権少将と右大将家の少将とは従兄弟ということになり、破線部の直後、「少将たちもいとしたしくをはする」という本文に照らして、とてもふさわしくおもわれる。しかし、「きたのかた」の直前で「右大将の」と補って解しているところなど、豊島「一九八三」も指摘するように、「本文の読みにやや無理のある」点は否めない。近時では、野村「二〇一七」が、「宇治十帖」の薫と匂宮の関係、すなわち年齢

が近接している叔父・甥の関係との照応を重視して、かつての「通説」の方を支持している。

以上のように、大まかに分けると二つの解釈があるのだが、ともにすっきりとしない。その根本的な理由は、後藤「二〇一七」が喝破したように、おそらく二重傍線部の「の少将」が「後人のさかしらな補入であ」り、「本来的なものではない」からなのだろう。後藤論文は、二重傍線部から破線部までが「親同士の間関係を述べる部分」であるべきだという卓見にもとづき、次のような本文整定案を示している。

この右大臣殿は、右大将の北の方の御せうとにものし給へば、

……

一見すると、かなり大胆な改訂にみえるかもしれないが、筆者もまた、こうした本文に「復元」しない限り、この⑦については到底解釈不能であろうと考える。

このように後藤論文の本文整定案を支持し、右大将家の少将と、右大臣家の権少将とが親しい従兄弟の関係にあるということをも前提として、つづく物語の展開をおさえてゆく。

本文⑦の直後では、右大臣家の少将が「権の少将」(五ウ)と呼ばれていること、そして彼は按察使大納言のもとに三年ほど通っているものの、その結婚相手に心を寄せてはいないことなどが明かされる。そして、本文は次の⑧へとつづいてゆくのである。

⑧この「権少将ガ」しのび給ふ御事をも、大将殿におはする、な



と思はせ給へり。いづれも、「ソレゾレノ親ガ」いとをかしき御  
ふるまひもあながちに制し聞こえ給へば、いといたくしのびて、  
大将殿へ迎へ給ふをりもあるを、いとかるくしう、つ、まし  
き心地し給へど、「今は、のたまはんことをたがへんも、あい  
なき事なり」「あるまじき所へおはするにてもなし」など、さ  
かしだち、<sup>す</sup>奨め奉る人々多かれば、「姉妹ハ」我にもあらず、時々  
おはする折もありけり。

(五ウー六オ)

右大臣家の権少将は、父からの諫めを受け、妹君のもとへ容易に  
は通えないことから、親しい右大将家の少将のもとへ出かけている  
とカムフラージュする。さらには、右大将家の少将にしも、権少将  
にしても、故大納言邸まで通うのが憚られたことから、それぞれが  
姉君あるいは妹君を右大将邸の方へひそかに迎えて逢うようになっ  
たという。

故大納言家の姫君たちにとって、こうした待遇は、破線部のよう  
に「いとかるくしう、つ、ましき心地」のすることであつた。つ  
まり、自分の軽い女としての待遇のようで、気乗りがしないのであ  
る。それでも、姉君も妹君もそれぞれ呼び出しに応じることになる。  
それは、二重傍線部「さかしだち、奨め奉る人々」、すなわち、い  
かにもしつかり者であるかのようにふるまいながら、男君からの呼  
び出しに応じることが積極的に奨める女房たちが多かったからであ  
る。この「人々」には、いったい誰がふくまれるのか。姉君、妹君  
それぞれの懸想人を手引きした張本人である少納言の君(本文②)、

そして妹君の乳母の娘(本文⑤)がふくまれている可能性は高そう  
だが、このあとの場面に登場する侍従の君、そして弁の君という側  
近の女房たちはいかがであらうか。二重傍線部の直後には「多かれ  
ば」とあるので、この人たちもこぞって奨めている可能性があるだ  
ろう。

ここでの女房たちのあり方からは、塚原「一九八三」が指摘する  
ように、「姫君の心中を理解せず」に対応している「浅慮」がみて  
とれるとともに、「現実に対応する姿勢」をもくみとることができ  
そうではある(一五九頁、頭注五)。留意しておきたいのは、呼び  
出しがあつたときに迎える車で移動させられるという、故大納言家  
の姫君たちにはふさわしくない、軽々しい待遇を決定づけたのが、  
名まえさえ示されることのない女房たちであつたということである。  
それは、責任者が明確ではないということでもある。

#### 四 一二つの取り違えを語る叙述

物語の展開としては、ここからいよいよ取り違え事件へとむかっ  
てゆく。まずは、権少将が叔母にあたる右大将の北の方が風邪だと  
いうので、その見舞いにかこつけて、右大将邸に泊まることにした。  
そして、故大納言邸に車をさし向ける。ただし、常々は権少将の乳  
母子、左衛門の尉が迎えるの使者となるところだが、このときは彼が  
控えていなかったのだ、これまでも「ときく」はこういうことに

奉公させてきた「いとつき／＼しき侍」(六オ)を派遣することに  
なった。左衛門の尉の不在が、このあとの取り違えの伏線となつて  
いるのは、もちろんのことである。

そして、物語本文は次のようにつづいてゆく。

⑨夜いたく更けて、かしこにまうでて、「少将殿より」とて、「し  
のびて聞こえむ」といふに、人々みな寝にけるに、姫君の御方  
の侍従の君に、「少将殿より」とて、御車奉り給へるよしを言  
ひければ、「侍従ハ」ねぼけにける心地に、「いづれぞ」と尋ぬ  
る事もなし。例も参ることなれば、と思ひて、「かう／＼」と  
君(「姉君」)に聞こゆれば、「姉君」「文などもなし。」「風邪にや、  
例ならぬ」など言へ」とのたまへば、「御使ひ、こち」と言は  
せて、妻戸を開けたれば、寄り来るに、「侍従」「御文など侍ら  
ねば、いかなる事にか。また、御風邪のけのものし給ふとて」  
と言ふに、「侍」「…」「中略」…と言へば、「侍従ハ」参りて「し  
か／＼」と聞こえて奨め奉れば、例の、「姉君ハ」人のま、な  
る御心にて、…「中略」…乗り給ひぬ。侍従ぞ参りぬる。

(六ウー七ウ)

この一段で、傍線部「姫君の御方の侍従の君」の対応に留意して  
みる。状況としては夜更けであつて、女房たちは全員が寝てしまつ  
ている。破線部の前半に「ねぼけにける心地」とあるので、侍従の  
君もまたそうであつただろう。野村「一九八四」が論じたとおり、  
ここでは『源氏物語』『浮舟』巻のケース、すなわち浮舟付きの女

房右近が、眠気におそわれつつ、匂宮を薫と思ひ込んで浮舟方へと  
導いてしまった例が想起されるだろう。ただし、あわせて破線部の  
後半「いづれぞ」と尋ぬる事もなし」とあることに留意しよう。

ちなみに、「浮舟」巻において右近が匂宮を手引きしたことが語ら  
れる段では、このような叙述はみられない。神田「一九八五」は、「思  
はぬ方にとまりする少将」において「姫君達の心理に語り手をして  
一体化させ得ない」ようなあり方、あるいは「対象世界をサデイス  
ティックなまでに冷たく突き放す語りの傍観的態度」をとらえてい  
た。たしかにそのとおりだが、姫君たちとの距離ということだけで  
なく、語り手が侍従の君という女房にどう向きあっているのかとい  
う点も確認したい。この破線部後半は、侍従の君がとるべき対応を  
とらなかつた瑕疵を具体的に指摘するものとなっている。

また、権少将からの手紙がないことについて懸念していた姉君は、  
仮病によつて今回の要請を断るよう指示している。それを受けた侍  
従の君は、そのことを権少将方の「侍」に伝えている。しかし、「侍」  
からの説明の言葉を受けると、今度はそれをそのまま姉君に伝えて  
いる。要は、何の工夫もなく、機転を利かせるようなこともなく、  
ただ機械的に伝達するばかりなのである。

あわせて、この⑨では、使者と女房とのやりとりがきわめて詳細  
であるということも注目される。かなり長大な引用となるため中略  
としたが、権少将の発言を丁寧で紹介しながら説明する「侍」と、  
それを取り次ぐ侍従の君とのやりとりは、右に確認したとおり、侍

従の君の対応があまりに機械的であるにもかかわらず、かなり長々と語られる。そして、結局のところ侍従の君は、二重傍線部のように右大将邸へ迎えられることを「褒め」るのであった。

次に、本文⑨の直後、すなわち右大将邸において取り違えが発覚するという箇所から引用してみる。

⑩……やうくあらぬとみなし給ひぬる心まどひぞ、うつ、とはおぼえぬや。かのむかし夢見しはじめよりも、なか／＼おそろしうあさましきに、やがてひきかづき給ひぬ。侍従こそは、「いかにと侍る事にか」と、「これはあらぬ事になん。御車寄せ侍らん」と泣く／＼言ふを、さばかり色なる御心には、ゆるし給ひてむや。〔侍従ハ〕寄りてひき放ち聞こゆべきならねば、泣く／＼几帳のうしろにゐたり。（七ウ／＼八オ）

本文⑩の傍線部「侍従こそは」の直前までは、相手がいつもの少将とは違うことに気づいた姉君の心情と様子が語られる。そして、傍線部以降で侍従の君の対応が語られるが、二つの破線部で「泣く／＼」が繰り返されているように、大変なうろたえ方をしている。もはややすすべもないという様子である。本文⑨での決定的な失態は取り返しのつかない状況を招いた。この⑩のあとでは権少将が「なれ顔」（ハウ）で姉君と契りをむすんでしまう。姉君のことは、ただ「女は、死ぬばかりぞ心うくおぼしたる」（同）と端的に短く語られるのみである。

つづいて、今度は妹君も、本来の相手ではない右大将家の少将と

関係させられることになった顛末が語られてゆく。ここでは、「例の、きよすへ参りて」（九オ）というように「（きよすへ）」は「清季」か、唐突に少将の従者の名まであらたに示されるものの、そのあとは、妹君が要請に応じて出かけたことがあっさりと言られる。さらに、妹君たちの乗った車が右大将邸に到着する場面へとすすむ。それが次の本文⑪である。

⑪御車寄せに少将おはして、ものなどのたまふに、あらぬ御けはひなれば、弁の君、「いとあさましくなん侍る」と申すに、君（「少将」も心疾く心得給ひて、日ごろも、いとにほやかに見まほしき御さまの、おのづから聞き給ふ折もありければ、いかで思ふとだにも、など人知れず思ひわたり給ひける事なれば、（少将）「なにか。あらずとてうとくおぼすべき」とて、かきいだきておろし給ふに、いかゞはすべき。さりとて、我さへ捨て奉るべきならねば、弁の君もおりぬ。女君は、たゞわな、かれて、動きだにし給はず。弁、いと近う、つと「妹君ヲ」とらへたれど、〔少将ハ〕何とかはおぼさん。『今はたゞ、さるべきにおぼしなせよに人の御ため、あしき心は侍らじ』とて几帳おし隔て給へれば、〔弁ハ〕せん方なくて泣きゐたり。（九オ／＼一〇オ）

右大将邸の「御車寄せ」には、少将自らが迎えに来ている。それが右大臣家の権少将ではないことに気づくのは、傍線部「弁の君」であった。妹君の側近女房とおぼしき弁の君は、真っ先に「いとあさましくなん侍る」と訴えるが、少将はかまわずに妹君を抱きかか

えて車から降ろす。そのあとの破線部が、弁の君の様子を伝える箇所である。弁の君は、どうにもしようがないとはいえ、妹君を見捨てるわけにもゆかないので車から降り、震える妹君の召し物か何かをぐつつかまえてみたものの、可能な抵抗といえはその程度で、あとは泣いているしかなかったという。一方、妹君のことを語る箇所は、右の⑪の中で「女君は、たゞわな、かれて、動きだにし給はず」という一文のみである。

以上の⑩・⑪などをみれば歴然としているように、取り違えの当事者たる姉君と妹君の語られ方は、きわめて簡略である。既に、本稿の「はじめに」で確認した先行研究がこの点をおよそネガティブにとりあげてきたとおりである。しかし、ここで見方を変えてみよう。故大納言邸の姉君と妹君を女主人公、あるいは物語の主要人物としてみれば、いかにも不出来な物語といわざるをえない。しかし、この物語作品が語ろうとしていることの中心は、取り違えなどよりも、それに関わった女房たちのことにあるのではないか。本文⑩・⑪などでは、特にそのような傾向が顕著といえるだろう。

## 五 女房たちにとっての物語——むすびにかえて——

「思はぬ方にとまりする少将」とは、いかなる短篇物語であったか。長篇物語の「筋書き式」と指摘した松村「一九五九」、あるいは長篇物語という様式のバロディーとみた神田「一九八五」などが論じ

ているとおり、短篇物語としてのあり方が、『堤中納言物語』に収められたほかの諸篇にくらべて異質であることはたしかなのだろう。しかし、二人の少将と、故大納言邸の姉君・妹君という四人を主要人物とする、取り違えを主題とした物語などと受けとめている限り、どうみても不出来な作品といわざるをえない。その程度の作品が今日まで読み継がれ、生き延びることなどありえないと決めつける必要はなからうが、しかし、あえて『堤中納言物語』という短篇物語集の一篇として選択され、こうして長く読まれつづけることになった「思はぬ方にとまりする少将」、その積極的な意義、あるいは存在価値というものはないのだろうか。

こうした問題意識から、『堤中納言物語』の他の諸篇と共通する点を探てみると、陣野「二〇〇三」以来、『堤中納言物語』の女房たちと読者たちに留意してきた筆者は、この「思はぬ方にとまりする少将」の場合もまた、女房の問題、さらに受容のあり方について探究されるべき要素を充分に有しているとおもうに至った。それは、この物語作品の実質的な役割、効能などに連なる可能性を考えることでもあった。

四人の主要人物のスイッチングまがいの関係を主題とする物語——そのような把握によれば、この物語は何とも後味のよろしくない、陰惨な、そしてまた中途半端な物語にしかみえない。しかし、女房たちの何とが、さつな対応、無責任な仲介、そしていざという時に犯してしまった決定的な失態といった部分をクローズアップし

てみると、それなりにリアルな描き方がなされている物語ともいえよう。そちらの方にこそ主眼があるのだ、と見方を大きく転換させる必要があるのではないか。この物語は、いい加減な女房たちの失敗例を集めた標本ともいえるべきであり、それらの標本は、現に勤務をしている（おそらくは）中世初期あたりの女房たちにとって、他山の石となりうるものであろう。<sup>⑤</sup> もしも、そのようなことが想定可能であるとすれば、この物語作品の存在意義、利用価値というのは明白だといえる。女房たちは、できるかぎり失敗を避けたいであろうし、自身の主人が不幸に陥ることのないように務めを全うしたいとおもうだろう。そのための指南書のような役割を、この作品が、さらにいえば『堤中納言物語』という物語集が果たした可能性について、今後検討してみたいとおもう。

短篇物語の特質はさまざま指摘しうるが、平安時代から鎌倉時代に創造された日本の「つくり物語」だけでなく、世界のあらゆる短篇に共通する決定的な特質がある。それは、至極当たり前のことから、短い時間で読みとおせることである。長篇物語を読むのには、相応の時間を要する。そして物語内にみられる情報も多岐にわたる。そのままでは扱いにくい。そこで、物語のダイジェスト化がなされる。『源氏物語』の場合、『源氏小鏡』などの例がよく知られている。それは、特に連歌師たちにとって重宝する「道具」として制作された。つまり、実利をとまうのだ。短時間で読むことが可能な短篇物語に関しても、何らかの実利、効能が期待されていたのではない

だろうか。

「思はぬ方にとまりする少将」では、みてきたように、よろしくない女房たちの行動の事例がそれなりに凝縮されている。それらを反面教師とすることには、効果が期待されよう。こうした問題について、本稿ではこれ以上の検討を深めることはかなわないので、いづれ別稿にてとりくむこととする。

※『堤中納言物語』の本文は、池田利夫（解題）『堤中納言物語 高松宮本』（復刻日本古典文学館、一九七七年）の影印に拠り、筆者が校訂した。引用本文のあとに付した（一）内には、高松宮家蔵本の丁数を記した。

※『源氏物語』「末摘花」巻の本文は、古代学協会・古代学研究所（編）『大島本源氏物語 第二巻』（角川書店、一九九六年）に拠り、筆者が校訂した。引用本文のあとに付した（一）内には、池田亀鑑（編者）『源氏物語大成 巻一 校異篇』（中央公論社、一九五三年）の頁数を記した。

#### 注

（１）本文「父」は、底本「こ」（字母は「古」）を後藤「二〇一七」にしたがって改めた。諸注の多くは「故大納言」と本文を校訂するが、「こ」を「不用」と指摘する注釈書もある（池田「一九八八」の一五頁、脚注（４）、また大槻「一九九二」の六〇頁、脚注七など）。「こ大納言も母うへも」という並列関係を勘案しても、「ち、」から「古」を字母とする「こ」への本文転訛を想定する後藤論文の見解が妥当であると考ええる。

（２）本文「たどり」は、底本「たより」を石川県立図書館蔵李花亭文庫本などの本文「たとり」により改めた。なお、後藤「二〇一七」は、思慮などの意をあらわす名詞「たどり」が正しいことを論じている。

（３）故大納言邸に通うようになった少将が、昼まで「寝過し給ふ折」（二



ウ)に相手の姫君を見ることが語られる箇所では、「いとあてにらうたく」とされ、また「心ぐるしきさま」がとらえられているが、それは、前々から少将が承知していた容姿についての叙述とはいいたいだろう。

- (4) 本文「ならねば」は、底本「なれは」を後藤「二〇一七」にしたがって改めた。また、その直後の「ゆくりなく」は、底本「故もなく」を神宮文庫蔵慈延大愚上人自筆書入本・尊経閣文庫蔵元禄本などの本文「ゆくりなく」により改めた。なお、松尾「一九七二」は、この「ゆくりなく」の本文の方が優れている可能性を指摘し(二三八頁)、後藤「二〇一七」も支持している。

- (5) この「思はぬ方にとまりする少将」の成立した時期、また他方において『堤中納言物語』という短篇物語集の編纂された時期が、かなり重要であるとおもわれるが、いずれも明確にはわからない。「思はぬ方にとまりする少将」については、たとえば土岐「一九七六」が、「御車寄せ」(本稿の本文⑪)という建築上の設備が確認されるのが院政期末以降であること、さらに「ねばけにける」(本稿の本文⑨)の動詞「ねばく(寝惚く)」の用例のあり方から、中世に入ってから成立ということを主張している。また新美「二〇〇四」も、「御車寄せ」ならびに引歌のあり方から、中世の成立を積極的に主張する。これに対して、井上「二〇一六」は平安末期あたりに成立している可能性を論じる。いずれにしても、「逢坂越えぬ権中納言」などの十一世紀中盤に成立した物語よりもずっとあとの物語であることは確かであろう。『堤中納言物語』の成立ということについては、本稿で述べたことを絡めながら今後考えたい。

## 引用文献

- 池田利夫(訳注)「一九八八」『対訳古典シリーズ 堤中納言物語』旺文社  
稲賀敬二ほか(校注・訳)「一九七二」『日本古典文学全集10 落窪物語 堤中納言物語』小学館  
稲賀敬二ほか(校注・訳)「二〇〇〇」『新編日本古典文学全集17 落窪物

語 堤中納言物語』小学館

井上新子「二〇一六」『堤中納言物語』所収作品の享受「堤中納言物語の言語空間——織りなされる言葉と時代——」Ⅳ第三章 翰林書房(↑初出は二〇〇六年)

大槻修ほか(校注)「一九九二」『新日本古典文学大系26 堤中納言物語』としかへばや物語 岩波書店

神田龍身「一九八五」『思はぬ方にとまりする少将』——短篇物語の終焉——『早稲田大学高等学院研究年誌』二九 早稲田大学高等学院

後藤康文「二〇一七」『思はぬ方にとまりする少将』とどこどころ「堤中納言物語の真相」6 武蔵野書院(↑初出は一九九三年)

下鳥朝代「二〇〇二」『劣りまさるけぢめ』——『堤中納言物語』「思はぬ方にとまりする少将」論——『湘南文学』三六 東海大学日本文学会

陣野英則「二〇〇三」『堤中納言物語』「このついで」の聴き手たち——物語文学の享受の一面——『古代中世文学論考刊行会(編)』『古代中世文学論考第九集』新典社

陣野英則「二〇〇四」『女房の話声とその機能』——「末摘花」巻の大輔命婦の場合——『源氏物語の話声と表現世界』Ⅰ第四章 勉誠出版(↑初出は一九九六年)

陣野英則「二〇〇六」『物語の語り・表現・文体 宇治の大君と中の君との峻別』室伏信助(監修) 上原作和(編)『人物で読む『源氏物語』第十九巻 大君・中の君』勉誠出版

鈴木一雄「一九八〇」『堤中納言物語』覚書『堤中納言物語序説』Ⅲ 桜楓社

塚原鉄雄(校注)「一九八三」『新潮日本古典集成 堤中納言物語』新潮社

土岐武治「一九七六」『思はぬ方にとまりする少将』の成立「堤中納言物語の注釈的研究」解説——三——後編 風間書房

豊島秀範「一九八三」『思はぬ方にとまりする少将物語』三谷榮一(編)『体系物語文学史 第三巻 物語文学の系譜Ⅰ 平安物語』有精堂出版

新美哲彦「二〇〇四」『堤中納言物語』の編纂時期——「思はぬ方にとまりする少将」の成立から——」田中隆昭（編）『日本古代文学と東アジア』勉誠出版

西木忠一「一九七〇」「思はぬ方にとまりする少将」雑考『滋賀大國文』八  
滋賀大國文会

野村倫子「一九八四」「思はぬ方にとまりする少将」小考——短篇物語の手  
法——『論究日本文学』四七 立命館大学日本文学会

野村倫子「二〇一七」「思はぬ方にとまりする少将」を読む——「宇治十帖」  
を起点に——」横溝博・久下裕利（編）『堤中納言物語の新世界』武蔵野  
書院

松尾 聰「一九七一」『堤中納言物語全釈』笠間書院

松村誠一「一九五九」「短篇物語の構成——堤中納言物語の諸篇——」『国語  
と国文学』三六―四 東京大学国語国文学会

吉海直人「二〇〇一」『堤中納言物語』の乳母達『乳母の基礎的研究——平  
安朝文学の視角——』第四編―第二十三章 影月堂文庫